

自己有用感

奉仕活動や職場体験活動等の他者との交流体験を通して、他者を好意的に受けとめたり、他者との絆や社会とのつながりを感じとったりする中で「自己有用感」は獲得されていきます。

自己有用感とは「自分の属する集団の中で、自分がどれだけ大切な存在であるかということをも自分自身で認識すること」です。自己有用感は自分に自信を高め、安易に問題行動に走ることを抑止したり、危険なものに近づくことを抑制したりする働きをもちます。

自己有用感とは

他者の存在を前提として自分の存在価値を感じる
誰かの役に立ちたいという成就感
誰かに必要とされているという満足感

過去に学習や学校生活に関して否定的な自己概念を抱いている子どもはその自己概念のために前に進めなくなっています。ほめる、励ます、認めるなど肯定的な評価を積極的にいき、自己有用感を体験的に積み重ねていけるよう配慮し、工夫していく必要があります。

ところで、類似の言葉に「自尊感情」があります。「自己有用感」は「自尊感情」と比べ、他者の存在を前提としているという点に違いがあります。

自己有用感を支える要素

1 自然体験の重視

自然体験の中からは子どもが工夫し耐えることを学びます。

2 遊びの見直し

集団の秩序を守ることの大切さと相手との関係で「押したり、引いたりする」生活の知恵を身に付けます。

また、他への思いやりやいたわりの気持ちが育ちます。

3 共同体験の大切さ

共同で作業することを通して、協力・奉仕の心を気持ちが育ってきます。

学校で自己有用感を育てていくために

【第1段階】・・・心の安定

学校は保護者や地域の人々と情報を交流して子どものよい面を見つけることが必要です。子どもの良い面を生かせる環境づくりが大切なことです。集団遊びや宿泊体験、職場体験などで活躍させることで子どもの心は安定します。

【第2段階】・・・成就感

自分一人の力で最後までやり遂げさせましょう。教師は必要最小限の助言・援助にしましょう。自分の力で完成できると「やった!」という成就感と自信を獲得します。

【第3段階】・・・評価の工夫

失敗体験もチャンスと捉えます。結果より努力を認め、ほめ励まします。子どもは誰でもはじめはよく失敗するものです。失敗の中からいろいろ学んでいきます。失敗した時に周りの子どもたちの許容的雰囲気や育てていくことも大事です。

【第4段階】・・・自己有用感の芽生え

第3段階で認め・ほめ・励ましたことを保護者や子どもの所属する集団に対してきちんと伝えることが大切です。

特に保護者に伝える場合にはよくわかるような言葉で伝えます。その時に教師の「わたしもうれしい」という気持ちを加えて伝えると効果があります。

【第5段階】・・・自己有用感の形成

第2～4段階を繰り返して指導することによって自己有用感が子どもの中に形成されていきます。

自己有用感家庭で芽生える

自己有用感を育むために、家庭では次のことが有効です。

1 スキンシップを通して温かさを伝えること

2 親子で一緒に過ごす体験

3 ほめる、励ます、認める声かけ

「家の中で一番大切な宝はあなたよ」
「とんぼはこうやってとるんだよ。ほら、とれた」
「ちゃんのそういうところがお父さんもお母さんも自慢なのよ」

自己有用感につながる言葉

子どもが大人に言われて1番うれしい言葉・・・それは「ありがとう」です。

「ありがとう」

ドアを開けてくれた時など、子どものちょっとした気遣いに「ありがとう」を。

さらに「ありがとう。お母さん(先生)は「うれしいわ」と感激も伝えてみませんか。

「あなたのおかげよ」

「手伝ってくれてありがとう。 ちゃんのおかげで早く終わったわ。とても助かったわ」

子どもが時間や労力をかけてしてくれことに心を込めて感謝の気持ちを伝えていきたいと思います。

- 【参考文献】 ・北島貞一「自己有用感 - 生きる力の核 - 」, 田研出版, 1995
・平木典子とアサーション研究グループ著『こころを癒すほめ言葉の本』, 大和出版, 1998